

第39回 兵庫県生物学会総会報告

期 日 昭和60年5月24日(金)・25日(土)
場 所 八鹿町民会館

日 程

開会のことば 理事長 当津 隆
会長あいさつ 会 長 室井 綽
来賓祝詞 八鹿町教育長 土江 良廣

兵庫県生物学会研究奨励金授与

- ・藤本光博 野生ザルの生態に関する研究
- ・岸本正幸 但馬の植物に関する研究
- ・南雲 努 生物教材の開発に関する研究

兵庫県生物学会感謝状贈呈

- ・朝倉 襄氏
- ・山本茂信氏

多年にわたり本学会発展のために尽力されました。
その功績はまことに大であります。ここに会員の総意
により、感謝の意を表します。

兵庫県生物学会会長 室井 綽

議 事

1. 昭和59年度事業会務報告 当津理事長
4. 23 理事会 西宮市立苦楽園中学校
5. 12 会計監査委員会 県立明石高等学校
5. 26 第38回総会 姫路市立教育研究所
8. 17～19 夏期研修会 神戸大学理学部付属臨海実験所
10. 13 猪股涼一・西村登 両氏の学位取得記念祝賀会 神戸飯店
12. 8 第11回公開講座 姫路市民会館
3. 9 常任理事会 八鹿町民会館
2. 昭和59年度会計決算報告(P参照) 上岡雅和
3. 同上監査報告 監査委員 富川哲夫
4. 昭和60年度事業会務計画案 当津理事長
1. 理事会 4. 27 県立明石高等学校
2. 会計監査委員会 4. 27 県立明石高等学校
3. 第39回総会 5. 24 八鹿町民会館
研究会 ～25 氷ノ山
4. 夏期研修会 8. 20 城崎郡日高町金谷
～21 阿瀬溪谷

5. 創立40周年記念準備委員会

6. 15 県立明石高等学校

・ハワイ研修旅行

昭和61. 8. 23～28(6日間)

費用 約28万円

主な研修地 ラン・アンセリウム栽培園, ハワイ火山国立公園, プナルウ黒砂海岸, コナ栽培園(ハワイ島), フォスター・ボタニカルガーデン研修, ハワイ大学で植物講義聴講及び実験農場見学(ホノルル)等

日程等問合わせ先

TEL 078-917-0887 当津隆理事長

・碩学 室井綽博士物語(仮称)刊行について

会長、室井博士が古稀を迎えられました。大慶に存じあげます。

時、恰も、兵庫県生物学会が新発足して40年、敗戦の焦土の中に芽吹いた創立総会で敏腕を振られたのが、少壮の室井先生でした。以来、わが学会を支える学識の最高指導者として、また、昭和48年からは会長の重責を続けられ、名実ともに組織の大黒柱となり、人づくりの核となられて、学会の充実、発展に寄与され続けておられます。

このたび、「碩学・室井綽博士物語」を創立40周年記念の企画にとりあげることにしましたのは、室井博士の半生記は、わが生物学会の歴史の証と考えられるからであります。

各界、各位のご協力をお願い申しあげます。

60. 5. 24 第39回総会

兵庫県生物学会理事長 当津 隆

- 参考
1. 農学博士取得へのみちのり
 2. 還暦祝賀会へ馳せ参じたあの人
 3. 県文化賞に輝いた日のこと
 4. 県生活功労賞と室井夫人の功
 5. 県植物目録への情熱
 6. 第1回公開講座の波紋
 7. 学会長としての有名税
 8. 富士竹類植物園長の夢
 9. 日本竹笹の会の主宰者の実力

10. 県花のじぎく, 県樹くすのきと博士
11. 神戸生物クラブの生字引
12. NHK趣味の園芸でのタレント振り
13. ラジオ関西, こども電話相談室での博識
14. 東奔西走, 講演のこぼれ話
15. ひょうご自然百科, 愛読者との交流
16. 華道界との縁
17. 著者の鬼の佛顔
18. 禁酒, 禁煙への意地
19. 教壇でのエピソード
20. 人間, 室井緯の素顔

6 第12回公開講座 11. 9 豊岡市民会館

- ・細見末雄「但馬の植物」について

7. 常任理事会・40年委員合同会議

S. 61. 3. 8 県立明石高等学校

8. 理事会 4. 26 県立明石高等学校

9. 会計監査委員会 4. 26 県立明石高等学校

10. その他

- ・創立40周年記念行事組織委員長 平畑政幸
- ・高校生物ハンドブック編集長 山田 隆(留任)
- ・淡路の自然 編集状況報告 岡田清隆
- ・但馬の自然 発刊計画 今井幸夫

5. 役員改選と補充

- ・5人委員会 (一色八郎・岡村はた・金澤龍・近藤浩文・谷口博各氏)

会員研究発表

1. 竹下 信 猪名川のβ中腐水域に分布する淡水海綿
2. 藤本光博 野生ザルの生態について

講演

「河川生物の生態研究の発展と展望」

とくに流水棲昆虫を中心に

金沢大学日本海域研究所研究員

理学博士 西村 登

1. はじめに
2. 流水棲昆虫の生態研究の動向
 - 1) 流水における底生昆虫の niche など
 - 2) 研究の動向(概観)
3. 河川環境と生物群集(静態論)
 - 1) 可児の河川形態論
 - 2) すみわけ理論の誕生
 - 3) 瀬と淵における昆虫群集の分布

4. 流水棲昆虫の生態研究の発展(動態論)

- 1) 幼虫の移動
- 2) 成虫の溯上
- 3) 出水による環境の変化
- 4) 出水の流水棲昆虫への影響と回復

5. 流水棲昆虫の生態研究の展望

1. はじめに

河川の生物は, おおまかにみると, 附着藻類, 底生動物および魚類などである。

そして, 河川生物の生態研究は, 一般生態学の一分野であるが, 一方淡水生物学または陸水生物学の一分野でもあるし, また藻類学, 昆虫学, 動物学および魚類学などにも含まれる。すなわち, 生物学=生命科学というケーキを図1のように水平に切って基本的分科に分けることもできるし, また一方でケーキを垂直に切って自然分類的分科に分けることもできる。

基本的分科
“層別”

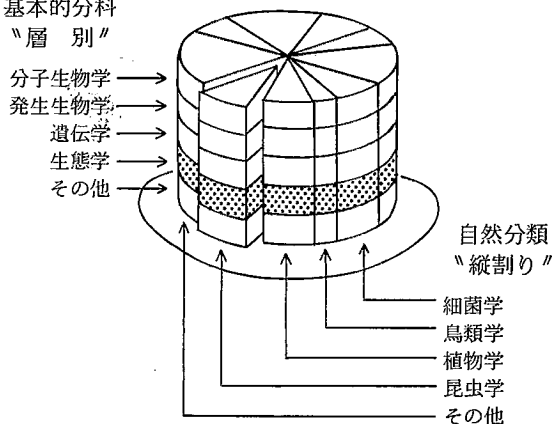


図1 生物学という“ケーキ”の基本的分科(横割り)と自然分類群分科(縦割り)(Odum, 1974)

上述のほか, 河川生物を生態学的に研究しようとすれば, 各生物の生息場所としての河川環境の諸条件を十分理解することが必要であり, そのためにはフォーレル(Forel, 1844-1912)によって創始され, ティーネマン(Thienemann, 1882-1960)によって体系づけられた陸水学(limnology)の知識が重要である。

しかし, 陸水学は当初より湖沼研究の成果によって発展したものである。湖沼は環境が閉鎖的で, それ自体ひとつの生態系としてまとまっているが, 河川は開放系である。1年という短時日または生物の1世代に限っていても, 河川ではその間度々洪水が起こり, その度に環境も生物群集も大きく変動してしまう。このように, 環境も生物群集も絶えず変動する河川では, 湖沼に比べ調査